

(2) 伝統行事-祭礼

① 里宮神社の祭礼行事

市房山神宮里宮神社は湯前城跡に建つ神社で、創建は昭和9年(1934)であるが、由緒は16世紀に遡り、歴代の相良家当主をはじめ、領民からひろく信仰を集め、春と秋の大祭をはじめとする祭礼行事が行われ、人びとの心のよりどころとして地域に欠かせない存在となっている。

その中で、最も賑わうのが春祭り(五穀豊穰祈願祭)と秋祭り(五穀豊穰感謝祭)となっている。現在は、湯前町内に氏子世帯が約1,500世帯おり、その中から現在の行政区割に基づく地区総代が約55名、さらに地区総代から20名が宮総代として活動している。

・春祭り

正式には「五穀豊穰祈願祭」とよばれ、神輿を担ぐ際の囃子である「どっこいどっこい」にちなんで通称「どっこい祭り」ともいわれる、市房山神宮里宮神社の祭礼では最大のもので、本宮である市房山に、球磨地域の結婚したての夫婦や出会いを求める人びとが縁結びを祈願して詣でた「お嶽さん参り」が、毎年旧暦3月16日に行われていたことに由来した期日に行われている。

春祭りの最大の催しは「神幸式」であり、氏神を神輿に乗せ、担ぎ手たちが町内を練り歩く。道路整備や交通事情、担ぎ手を中心とした関係者の生活環境の変化などもあり、巡行の経路や形態に多少の変化は見られるものの、里宮神社を中心とした神輿の巡行は、春の一大行事として現在も受け継がれている。



写真 4-36 神輿の完成を祝い行われた稚児行列



写真 4-37 昭和期の神輿



写真 4-38 昭和 50 年代の神輿行列



写真 4-39 現在の神輿行列

・ 秋祭り

秋祭りは、市房山神宮里宮神社の祭礼の中で、最も開催規模が大きく、毎年 11 月 15 日に行われ、春祭りと同じく昭和 9 年（1934）の里宮神社完成後から開催されている。

昭和 40 年（1965）以降の『広報ゆのまえ』には、町の恒例行事としての記事が掲載され、時流に沿った祭の変遷が記録として残されている。

秋祭りは、神前にその年の収穫を報告し、感謝するお祭りであることから、正式には「五穀豊穰感謝祭」という。「献幣式」が行われ、前夜祭で「球磨神楽」が、祭りの当日に「東方組太鼓踊り」と「浅鹿野棒踊り」がそれぞれ神前に集い、舞踊を奉納する。

こうした奉納舞踊は、その厳かな雰囲気で見る者を「ハレ」の空間に引き込み、踊り手と一体となった独特の世界をつくっている。



写真 4-40 秋祭りでの神楽奉納



写真 4-41 秋祭りでの浅鹿野棒踊り奉納



写真 4-42 秋祭りでの東方組太鼓踊り奉納

② 集落を中心とする伝統行事

本町の行政区は、平成29年12月末現在で23地区となっており、その下部組織として26の公民分館が置かれている。さらに数軒から10軒程度がまとまる隣保班と呼ばれる自治組織がある。

本町の地区割では現在、大字を冠していないが、明治期の公文書に「湯前村東（または西）・・・番地」と記されたものがあり、牧良川と幸野溝を結ぶ線で大きく東と西に分けられていた。また、明治期の名寄帳では、城、猪鹿倉、二本柿の名称でまとめられ、城や里といった文字も現在の行政区名に残っている。本町の伝統行事や祭礼は、こうした各集落を中心に営まれている。

表4-7 地区割りと住民数

地区名	公民分館名	隣保班数	世帯数	住民数			旧名寄帳の集落割	左記区分の集落人口
				男	女	計		
浜川	浜川	7	37	54	62	116	城	693
下城	下城	3	37	55	55	110		
古城	古城	6	72	94	110	204		
上染田	上染田	5	47	51	58	109		
下染田	下染田	6	59	68	86	154		
上里1	上里1	9	84	100	131	231	里	1,153
上里2	上里2	3	33	29	44	73		
上里3	上里3	10	110	145	156	301		
中里1	中里1	2	30	30	38	68		
中里2	中里2	10	76	75	103	178		
下里	下里	4	69	74	92	166		
植木	植木	5	49	68	68	136		
浅鹿野	浅鹿野	13	89	108	124	232		
牧良	牧良							
上猪	上猪	5	14	10	10	20		
中猪	中猪	8	65	78	82	160		
野中田1	野中田1	7	62	84	82	166		
野中田2	野中田2	5	60	61	74	135		
野中田3	野中田3	13	118	132	136	268		
田上	田上	10	82	108	117	225	二本柿	707
上村	上村	11	112	121	132	253		
下村	下村	12	90	113	116	229		
馬場	馬場	14	91	126	119	245	東方	408
山口	山口							
瀬戸口	瀬戸口	6	59	77	86	163		
辻	辻							
計		174	1,545	1,861	2,081	3,942		3,942
特別養護老人ホーム			88	26	62	88		
合計			1,633	1,887	2,143	4,030		

※ 上表の「旧名寄帳の集落割」の欄中、旧名寄帳は、城・猪鹿倉・二本柿の3冊が現存し、里・東方は『湯前の地名と文化財』より引用した。

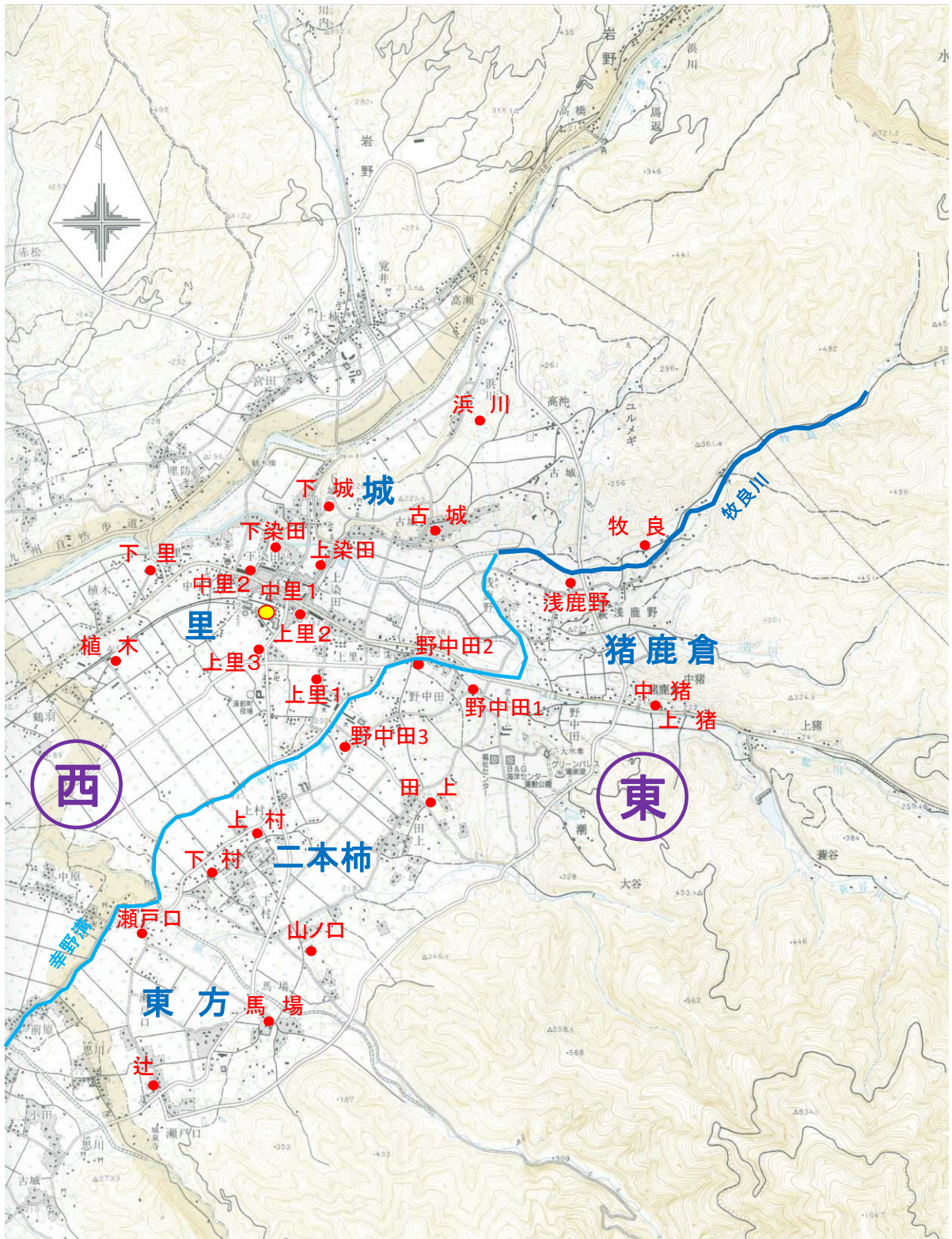


图 4-3 地区名と公民分館配置図

集落で行われる伝統的行事としては、潮神社（野中田区）の祭や毘沙門堂（上村区）の花祭など、その集落にある社寺等に関連した特有の祭事と、地藏祭や十五夜祭など複数集落で同様の祭事が行われるものがある。これらの行事には直会（なおらい）と呼ばれる飲食を共にする光景が見られ、そこには必ず球磨焼酎が出される。神仏との共飲共食を住民が楽しむ貴重な機会である。

また、多くの集落で行われている行事は、元来は信仰を基本とし、社寺や民家などに集まる形で行われていたが、参加者の高齢化や住民の生活環境の変化などの要因により、現在では社寺や公民分館へ地域の人々が集い、農耕作業の合間や季節毎の集落行事、日常生活に関わる語らいの場ともなっている。

こうして行事の内容が時代と共に変容しているにもかかわらず、名称が残されていることに、地域の人々の行事に対する思いの一端を感じ取ることができる。

③ 信仰に由来する伝統行事

・ 地藏祭

地区に祀られている地藏像の前掛けを、主に子どもを中心とした住民が年一回取り替える際に行われる行事で、地区毎に地藏堂などに集まるが、実施する目的や内容が地区により異なる。

7月下旬に行われる浜川区では昔、地区内を流れる幸野溝で住民の転落事故があったことから、事故で亡くなった住民の供養と水難防止を祈願するなどしている。

古城区は以前から火災の多い地区であったが、地区の殆どが台地上にあることから水の確保が困難であった。こうしたことから宮崎県の宇野間不動尊を分祀し防火を祈願したことをきっかけに始められた。「宇野間地藏祭」という名称で、地区では「火の神」ともよばれ、2月は住民が、11月は里宮神社宮司を呼んでそれぞれ神事を執り行う。

中里1区と2区では共催という形を取り、観光物産施設「湯～とぴあ」で行っている。これは、地区にある地藏堂が国道沿いで車の往来もあることから、危険防止のために離れた場所で開催するためである。

・ 御伊勢講

本来は伊勢神宮参詣を目的に住民同士で組まれる組織（講）のことで、馬場区では昭和16年（1941）からの記録が残されている。1月と9月に地区内の家々を回り、講金を集めて参

拝しているとのことであるが、現在ではこうした形を残すところは馬場区のみで、他の地区では山ノ口区（1、9月実施）のように当番の家で祀っていた御神体を公民分館に運んで会食を行ったり、瀬戸口区（1、9月実施）では多良木天満宮宮司による神事の後に会食を行ったりするといったように、さまざまな形態で行われている。

・薬師祭

瀬戸口区でのみ7月上旬に行われている祭で、以前は地区の薬師堂で行われていたが、薬師堂は解体され、現在は薬師如来像が公民分館に移されていることから、住民は公民分館に集まって参詣し、当番となる人が参拝者を煮しめや漬け物などの料理でもてなす。



写真 4-43 薬師像へ参詣する住民



写真 4-44 薬師像の前へ集まる子どもたち

・ヤツノ様

瀬戸口区で薬師祭の1週間後に行われる祭で、もとは区内の^{しもかきぎ}下柿木にあった^{やつのお}八尾神社が明治22年(1889)に菅原神社へ合祀された後、しばらく地区にあった大イチョウの切り株の上に祀られていたものを公民分館に移したもので、薬師祭とは別の当番が、参拝した住民を料理でもてなす。

「ヤツノーさん」や「ヤツノさん」といわれる木像は、八大竜王のことを指すという話も聞かれる。また、子どもたちにお菓子や手作りの団子などをあげることから、「だごもらい」ともいわれている。



写真 4-45 料理を作る当番の人びと



写真 4-46 分館内で祀られるヤツノ様

・ 祈禱時（きとうどき・きとどき）

「祈禱祭」の名でも行われ、集落内の安全から五穀豊穡まで、祈願する内容はさまざまであり、神仏の区別なく祭礼として行われることが多い。

山ノ口区では7月と9月に「酒手^{さかて}」といわれる当番が家々を回り集金し、集まったお金で豆腐などを買い、酒盛りをするのが習わしとなっているほか、6月に実施する瀬戸口区では農家の田植え後に行われることから「さなぼり」ともよばれ、多良木天満宮宮司による神事後、豆腐半丁で会食する。その年の担当者は地区に病気や厄災が入らないよう天満宮でお祓いた札を、区に入る道筋と幸野溝に立てる。

・ お釈迦祭、花祭

上村区で毎年4月第1日曜日に行われる、釈迦の生誕を祝う行事である。毎年花飾りをしつらえて公民分館に飾るほか、甘茶を作り住民が会食する。田上区では「お釈迦祭」として、旧暦4月8日に地区内の民家で甘茶の配布などを行っている。

古来より4月8日は、灌仏会^{かんぶつえ}として釈迦の生誕を祝う仏教の重要日であり、寺院では草花で造った建物の中に釈迦像を立て、甘茶をかけるということを行っているが、一般的に農業や山野での活動が始まる時期でもあることから、春の訪れを祝う行事として行われたり、仏事でも先祖供養が行われたりするなど、その形態はさまざまである。



写真 4-47 花祭りの建物

花祭りは西日本を中心にシャクナゲなどの花を竹竿の先に束ねて庭先や木の枝に掲げる花立てなどのように、農事に関係する山の神を祀る行事が灌仏会の中身を一部吸収して発展したものとされているが、灌仏会の基本的な中身を踏襲している上村区の花祭りは特徴的である。

・ 涅槃会^{ねはんえ}法要

旧暦で釈迦入滅の日といわれている2月15日の前後に、上村区の公民分館で行われているもので、日本では飛鳥時代に奈良・元興寺^{がんこうじ}で行われたのが最初と伝えられており、4月8

日の^{ぶっしょうえ}仏生会、12月8日の^{じょうどうえ}成道会とともに^{さんぶつえ}三仏会（釈迦の三大法要）の一つに数えられる。

掲げられる涅槃図は、縦97.8センチ、横56.5センチの紙本（木版・著色）で、釈迦が^き沙^ら羅^ら双^{そう}樹^{じゆ}の下で頭を北にして西を向き、右脇を下にした状態で伏せる周囲に、^{じっかい}十界の^{しゆじゆう}衆生が集い悲しむ様子を描いている。これを分館内で開帳し、町内の^{みょうどうじ}明導寺、^{えいりゆうじ}栄立寺、^{しんじゆんじ}信順寺の各住職が毎年交代で読経する。

通常は長野市の^{ぜんこうじ}善光寺（御会式）や熊本市の^{だいじじ}大慈寺（おねはん祭）のように寺院単位で行

われることの多い行事であるが、地区の公民分館で行われるのは珍しい例といえる。



写真4-48 上村区での涅槃会法要

・子ども御輿

下村区で毎年8月のお盆の頃に行われる。子どもたちが台車に乗せた御輿を引いて地区内を練り歩き、道中では地区の人たちが、おひねりを子どもたちに渡す。下村区が子どもの声で一番にぎわう時季である。

平成4年（1992）に、お盆を賑やかにすることを目的に地区の有志によってはじめられ、現在は平成11年（1999）に寄贈された御輿が地区内を回っている。



写真4-49 地区で御輿を引く子どもたち

④ 農耕に関する伝統行事

・鐘の織

ひろく「鐘の緒織」の名で知られるもので、農耕作業の合間に集落内の女性が集い、奉納用の旗を織っていたものが語源と考えられ、奉納された旗はお堂の鐘紐とされることもある。現在は単に茶話会となっていることが多い。



写真4-50 鐘の織での直会（浜川）

瀬戸口区では、宝陀寺観音の鐘紐が長さ1丈4尺(約4.24メートル)と決められている。これは、参拝者がお堂に直接上がることなく鐘を鳴らせるように配慮した長さであるといわれ、遅くとも明治の頃からこの長さで継承されている。

・さなぶり(さなぼり)

田植えの終わる7月頃に行われるもので、「サ」と呼ばれる田の神が天にのぼることから「さのぼり」といわれ、転訛して「さなぶり(さなぼり)」となった。但し、馬場地区では由来が異なり、地区で釈迦の神殿を構えることを指している。

以前はどここの地区でも見られたそうで、田植え作業が機械化された近年ではこうした光景を見ることは少なくなったが、現在でも公民分館で行う山ノ口区や、牧良区のように区内の各家で行っているケースがある。

・梅ちぎり

祭礼ではないものの、戦後「女性の時代」や「食の安全・安心」を掲げ、地区の女性たちの活動を牽引してきた山北幸氏が立ち上げた「下村婦人会」の活動を支えるために上村、下村、瀬戸口の各地区で行われているもので、下村婦人会で製造する加工品の材料となる梅を、地区の婦人会(婦人部)や子ども会が収穫し、地区内で個人的に販売した残りを提供する。

以前は下村婦人会の地元である下村区で、会の活動を支える住民たちにより行われていたが、近年は隣接する上村区や瀬戸口区でも行われるようになり、瀬戸口区では城泉寺や宝陀寺といったお寺の境内で収穫が行われている。

⑤ 相良三十三観音巡りに関する風習

相良三十三観音巡りは江戸時代に入吉藩で始められた巡礼で、札所として選ばれた33箇所(重複を含めると35箇所)の観音堂を巡ると入吉・球磨地域を1周するようになっている。

相良氏統治下の球磨地域では、相良氏の菩提寺であり、現在の入吉市に所在する願成寺がんじょうじを中心に広まった阿弥陀信仰や弘法大師信仰、また、民間信仰では庚申信仰や地藏信仰など多くの信仰があったが、特に相良三十三観音巡りは、時代による変化がありながらも毎年彼岸の時季に行われ、今日まで受け継がれている地域にとって代表的な信仰の一形態である。

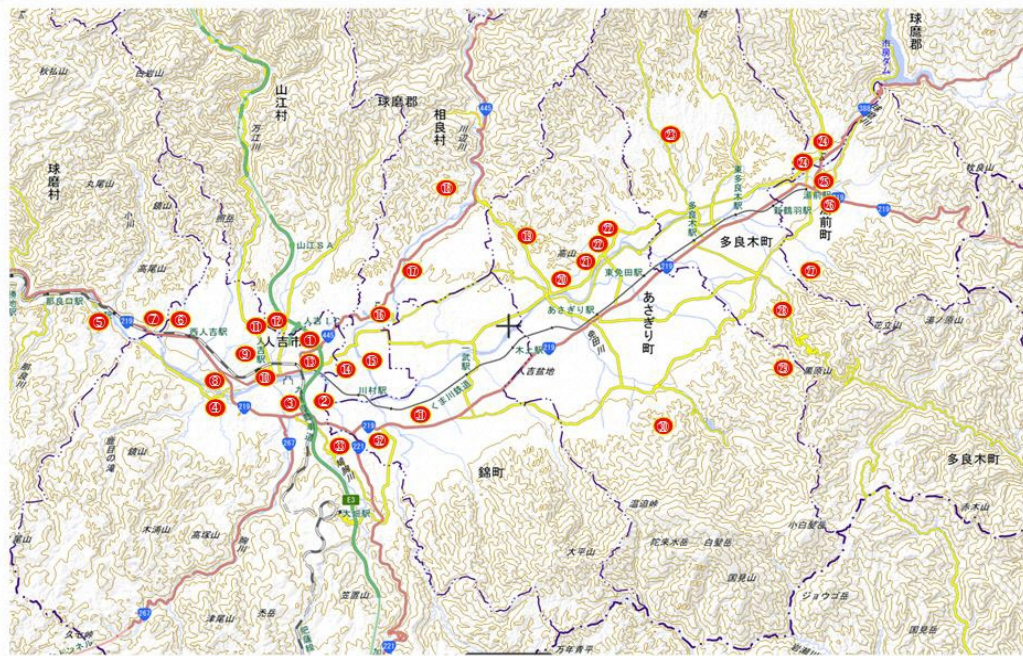


図4-4 相良三十三観音札所位置図

表4-8 相良三十三観音札所一覧

①	清水観音	⑪	永田(芦原)観音	⑳	永峰観音	㉑	宮原観音
②	中尾観音	⑫	合戦嶺観音	㉒	上手観音	㉓	秋時観音
③	矢瀬が津留観音	⑬	観音寺観音	㉔	覚井観音	㉕	土屋観音
④	三日原観音	⑭	十島観音	㉖	栖山観音	㉗	新宮寺六観音
⑤	鵜口観音	⑮	蓑毛観音	㉘	生善院観音	㉙	赤池観音
⑥	嵯峨里観音	⑯	深水観音	㉚	龍泉寺観音		
⑦	石室観音	㉀	上園観音	㉛	普門寺観音		
⑧	湯の元観音	㉁	廻り観音	㉜	上里町観音		
⑨	村山観音	㉂	内山観音	㉝	宝陀寺観音		
⑩	瀬原観音	㉃	植深田観音	㉞	中山観音		

相良三十三観音霊場は、「西国三十三ヶ所巡礼」を手本として、球磨地域にある100ヶ所をこえる観音堂の中から、人吉藩家老の井口武親が選んだ33ヶ所の観音霊場のことで、18世紀の終わり頃、観音菩薩の三十三身にちなんで選定され、巡礼の地とされるようになった。後に観音巡礼の風習も広がりを見せ、現在まで人びとの精神的なよりどころとなっている。

観音像はそのほとんどが普段は見ることができず、一斉開帳は、秋季の1週間、近年では春季も1日だけといったように開帳を行っている札所が多い。この際に巡礼者(観光客も含

む)は観音堂周辺の地域住民によって行われる「お接待」によりもてなしを受け、巡礼者だけでなく観光客も訪れる憩いの場ともなっている。

町内では、第25番札所の普門寺観音、第26番札所の上里町観音、第27番札所の宝陀寺観音の3箇所が選定されている。

相良三十三観音巡りの中で行われる重要な活動は、観光客を含む参拝者が各札所で詠む「御詠歌」と、札所を管理する住民が当番制でもてなす「お接待」である。



写真 4-51 普門寺観音堂 (25 番札所) お接待



写真 4-52 普門寺観音堂の観音像



写真 4-53 上里観音堂 (26 番札所) お接待



写真 4-54 敷地内の墓碑等



写真 4-55 宝陀寺観音堂 (27 番札所) と参道



・御詠歌

御詠歌は、人吉藩家老であった井口武親が隠居中に札所を選定した際、中山観音堂(第28番札所、多良木町)で詠じたのが最初といわれている。札所と観音菩薩にまつわる33の願が詠み込まれており、観音巡礼の風習が一般にも広まってからは、現在も春と秋の一斉開帳の時季を中心に、各所で巡礼者が詠じる光景が見られるようになった。

町内の札所で詠じられた歌は、以下のようなものである。(赤字の部分が札所名)

・第25番札所 普門寺観音

たれのため 普き門を出し身の まどかに通う道に入るべく
吹く風にもれて つとふや むれの鐘 しばしはのりの 心すまさん

・第26番札所 上里町観音

ねがいつつ西のむかへを まちおらん 心にそむるむらさきの雲
みな人の心の闇をてらさんと まち出る月の影のさやけさ

・第27番札所 宝陀寺観音

代々のくめども尽きぬ法の水 ふかきをしえのかぎり知られず
のりの水くめどもつきぬ山の井の ふかきおしへはそこきよきして

※ 宝陀寺観音の「くめ」は、鎌倉時代頃に宝陀寺を建立したといわれている在地の豪族久米氏からとられたもの。

・お接待

一斉開帳の際には、観音堂を守る堂守や地域に暮らす女性たちが中心となって「お接待」と呼ばれるもてなしを行い、普段ひっそりとしている各所の観音堂の周辺がひととき賑わいをみせる。

この一斉開帳に向けて観音堂と周辺の清掃や建物の風通しといった恒常的な維持管理は、地域住民の手によって毎月行われ、一斉開帳時以外の巡礼者等にも年間を通じて温かく迎え入れる人々の心が感じられる。

お接待の内容は、お茶や漬物、札所によっては、ぼたもち(おはぎ)や煮しめ等を用意する札所もあり、参拝はもちろん、お接待を楽しみに訪れる人も年々増加している。こうしたお接待の中で、本町内では、第27番札所の宝陀寺観音堂において、他の観音堂と異なり「ささげ豆」を明治の頃から提供している。

ささげ豆は、主に秋の一斉開帳に向けて栽培が行われる。稲作の作業が落ち着く夏頃に種

を蒔き、8月下旬～9月上旬迄に収穫。その後2～3日程度乾燥させたものを瓶などに入れて保存し、この豆は、翌年の栽培用の種子ともなって、ささげ豆の栽培もお接待とともに綿々と受け継がれている。

収穫されたささげ豆は、砂糖などで甘く煮たものが提供され、一斉開帳ではお接待を行うが、期間毎に担当する隣保班が変わるため、ささげ豆や漬物の味付けも変わり、こうした味の違いを楽しむために札所を訪れる人も多い。

なぜささげ豆が提供されるようになったのか明確な理由は不明だが、本町は球磨地域の中でも稲作が盛んな場所であり、その作業の合間に作ることができて、かつ調理もすぐにできることからはじまったともいわれている。

また、主に関東方面で赤飯を作るときに小豆の代わりにささげ豆を用いる風習があるように、小豆では煮炊きの途中で割れることが、三十三観音巡りの不成就を予期させることから、これを忌避するために用いたともいわれている。

町内では3つの札所のほか、明導寺阿弥陀堂や八勝寺阿弥陀堂、御大師堂でも彼岸に開帳を行い、法要やお接待が行われ、札所同様のもてなしを行っている。



写真 4-56 お接待の様子 (普門寺観音堂)



写真 4-57 宝陀寺観音堂で出されるささげ豆



写真 4-58 奉納された旗や鐘紐



写真 4-59 明導寺阿弥陀堂の秋季法要



写真 4-60 お接待の様子 (八勝寺阿弥陀堂)



写真 4-61 お接待の様子 (八勝寺阿弥陀堂)

(3) 球磨焼酎

球磨焼酎は米を主原料とする焼酎の呼称で、世界貿易機関 (WTO) の地理的表示に関する協定 (TRIPS 協定) による地理的表示が平成 7 年 (1995) に認められ、国内でも平成 19 年 (2007) 1 月、特許庁の地域団体商標に登録され、現在は以下のような公式な定義の下で造られている。

- 米のみを原料とする
- 熊本県球磨郡および人吉市の地下水のみを使用
- 熊本県球磨郡および人吉市において単式蒸留機によって蒸留、びん詰したもの

これまでは米とこうじを発酵させた「もろみ」に米と水を加える「二段仕込み」製法で造ることが求められていたが、平成 30 年 (2018) 2 月からは「もろみ」にさらにこうじを加えて発酵させる「全こうじ仕込み」の製法を使った焼酎も球磨焼酎と名乗れるようになった。

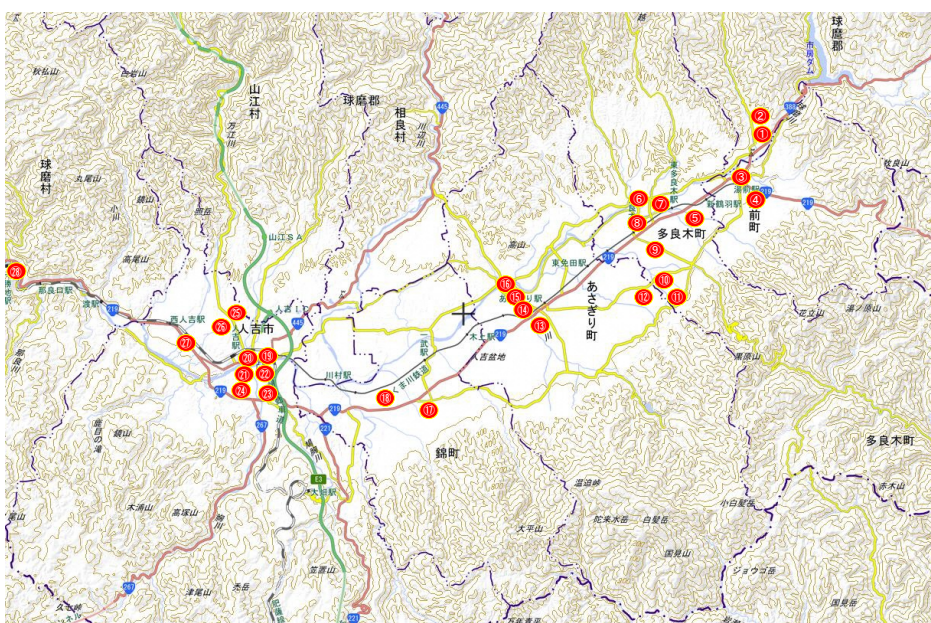


図 4 - 5 球磨焼酎蔵元位置図

表 4 - 9 球磨焼酎の蔵元

① 合資会社大石酒造場	⑧ 房の露株式会社	⑮ 合資会社高田酒造場	㉒ 球磨焼酎株式会社
② 有限会社松下醸造場	⑨ 木下醸造所	⑯ 合資会社宮原酒造場	㉓ 合資会社寿福酒造場
③ 有限会社林酒造場	⑩ 有限会社那須酒造場	⑰ 常楽酒造株式会社	㉔ 合資会社福田酒造商店
④ 合名会社豊永酒造	⑪ 高橋酒造株式会社多良木工場	⑱ 六調子酒造株式会社	㉕ 深野酒造株式会社
⑤ 株式会社恒松酒造本店	⑫ 株式会社堤酒造	⑲ 株式会社鳥飼酒造	㉖ 株式会社白岳酒造研究所
⑥ 抜群酒造合資会社	⑬ 松の泉酒造合資会社	⑳ 合資会社淵田酒造場	㉗ 合資会社大和一酒造元
⑦ 合資会社宮元酒造場	⑭ 合資会社松本酒造場	㉑ 織月酒造株式会社	㉘ 有限会社淵田酒造本店

本町では、江戸中期創業といわれる有限会社林酒造場と、明治27年(1894)創業の合名会社豊永酒造の2箇所の蔵元が醸造を行っている。

・有限会社 林酒造場

林酒造場は、江戸時代の『球磨絵図』にも歴代の人吉藩主が参勤交代や市房山への参詣の途上で滞在した「御假屋」としての記録が残されており、後年幾度かの増築を行ったものの、母屋や蔵といった江戸期からの建造物も現存し、現在も創業当時の雰囲気を保っている。



写真 4-62 『球磨絵図』写にみる假屋(現林酒造場)周辺(人吉市教育委員会蔵)



写真 4-63 現在の林酒造場



写真 4-64 林酒造場 住居部分

・ 合名会社 豊永酒造

豊永酒造においては、敷地内の建物は林酒造場同様に幾度かの増築等を行っているが、煉瓦造りの蒸留用煙突を中心に、明治創業当初からの建造物が多く残されている。

また、自社所有田で原料米の生産も行っているほか、田植えや稲刈体験等の生産活動、蔵祭の開催等にも取り組んでおり、地域の内外から多くの人が訪れている。



写真 4-65 豊永酒造



写真 4-66 豊永酒造 (蒸留用の煙突)